

Special Essay

取 巻 く 環 境

久留米大学病院 病院長
加納 龍彦

環境が人を造る；私が講師に昇任する時、「これから講師に相応しい人格、学識を身に付ける努力をなさい」と教授から訓示を受けた。私は気が弱くて本人になかなか直接言えないので、婉曲に、この話を折につけ教室員にする。自分が退職したらどうなると、よく心配する。大抵の場合、後任の方がしっかりその役をこなす。

顔の表情；エレベーターに乗り合わせた医師がどの診療科か推測する。その後、そっと名札をみる。表情、体型、仕草、ふとした日常会話から、内科系か外科系か、あるいはどの診療科の医師か、ほぼ当たる。誠実に生きてこられたお百姓さん、漁師さん等の顔の皺には、言い得ぬ深みがある。不誠実さも、いつしか顔に刻まれることを肝に銘じるべし。

家族の影響；家内が歳を重ねるにつれ、性格が母親に似てくる。最近、お見合いに同行する場合、その母親をよく観察、老後を想定することを教える。親、兄姉は反面教師的役割も担う。次男が真面目で律儀な生活を送るのは、長男のお陰かも知れない。長男への非難は筋違いと言い聞かせている。

認知症（老人性痴呆）対策；ピンコロ（ピンピンと生き長らえて、ある日突然コロリと死ぬ）は、言い得て妙である。本心をついている。医療費削減を掲げる行政は、ピンコロ政策をお題目にしている。引き籠りは“ぼけ”を助長するとのこと。敢えて、多忙な環境に身を投じるも、“ぼけ”予防対策の戦略である。

生活習慣病への疑問；美味しいものを食べ、身体を余り使わない生活を送ってきた結果、あるいは長年にわたる喫煙、飲酒の結果、など生活習慣に関連した疾患に対し国民皆保健制度を理由に高度医療を要求されても、違和感を覚える。術前日まで煙草を止めず、術後肺合併症が起らない術中麻酔管理をお願いします、と言われても困るのです。この「甘えの構造」は地球温暖化も然り。健全な発育、発展に忍耐は欠かせない。

ストレスへの対応；急速なストレス社会の拡大浸透に対して、ヒトの身体はそのストレスに耐えるべき進化が間に合っていないと痛感する。抗ストレス作用があると言われるエンドルフィン類の体内産生が足りてない。医療を含めた社会構造は、単純化、簡素化に逆行している。食べて寝る、酒を飲む、体を動かす、など自助努力もさることながら、最近、気に入っている言葉は、「私はストレスを活力源としている。ストレスが枯渇すると生きていけません」。一種の自己暗示療法である。

